



しもながや

令和4年2月28日 発行

横浜市立下永谷小学校

おつかい

校長 鈴木 陽一

「〇〇ちゃん、どうしたの。おつかい？」と低学年の子に高学年の子が声をかけると「うん、□年生のところへ△をとりにいくの。」という返事が返ってきました。見るとその教室は、中に人がいる気配はあるのですが、電気が消えていて声をかけにくい雰囲気です。ノックをするのをためらっていたようです。きっとその子は、「教室の扉をノックして、失礼しますと言い、何々を貸して下さい。ときちんと頼むのですよ。」と教わり言い方も練習してきたと思います。低学年の子にとって、他の教室に行くだけでもちょっとした冒険です。それをクリアして教室の前までたどり着きました。しかし、教室が真っ暗で普段の様子と違うという予期せぬ壁があったことで立ち止まってしまっていたのでしょう。

「子どものつかい」という言葉があります。言われたこと・頼まれたことしか言えない・できないという意味で使われることがあります。さらに「役に立たない。」という意味で使われるときもあります。しかし、「子どものつかい」はとても子どもの成長にとって大切なことです。自分の役目をきちんと理解し、かつ、目的の場所まで行かなければならないのです。滅多に行かないところへ行くことは子ども（特に低学年）にとって大変です。ドキドキする子どもも多いでしょう。その途中で予期せぬこと（今回は教室に電気がついてなくて声がかけにくい雰囲気）に出くわすことや、説明をしてもなかなか相手に伝わらないこともあります。なかには、困って戻ってきってしまう子どももいます。何度かやり直すことになるかもしれませんが、おつかいをやり遂げることで、相手への話し方やどう判断してどう行動したらいいかを覚えていくのです。おつかいは頼まれたことでありますが、こういう経験を繰り返すことで、判断力や思考力が培われていきます。そして、頼まれたことをやり遂げた満足感や頼んだ大人から誉めてもらったときのうれしさがさらに次へのやる気につながるのです。大人は、子どもが、「やってみよう」「やってよかった」というお気持ちが持てるようにすることが大事です。

声をかけた高学年の子は、さすがです。低学年の子が困っていると判断し、手助けをしてあげようと声をかけたのです。おつかいのような頼まれごとでなく一歩進んで他の子の問題を解決してあげようとしたのです。もしかするとその子ども自分が低学年の時に上の学年の子や大人からそんな声かけをしてもらった経験があったのかもしれませんが、学校とは、こんな子どもたちの微笑ましい関わりや成長の様子がつながっていくところです。

感染症対策の中、学習や活動に制限はありましたが、そんな中でも子ども同士や教職員との関わりを通して、子どもたちは成長してってくれました。子どもたちの日々の成長のために、教職員一同、さらに尽力してまいります。今年度は、残りわずかとなりましたが、地域の皆様・保護者の皆様には、これからもご理解ご協力をお願いいたします。